

メッセージ「もうひとつの幻」

水谷 憲 牧師

聖書 ハバクク書 2章1-4節

本日の聖書は、旧約聖書の『ハバクク書』と呼ばれる書物です。この『ハバクク書』というものは、39巻ある旧約聖書の中でもあまり馴染みのない書物かもしれません。まあそれもそのはず、この書物の名前となっているハバククという預言者は、名前以外はほとんど何も知られていない謎の人物でありました。ただ、このハバククという預言者はその預言の内容・この書物の内容から、ダビデの打ち立てたイスラエル王国が南北に分裂した後の、南ユダ王国が滅亡する少し前、預言者エレミヤやこの書物の前に位置するナホムと同時代の人間であったことが推測されています。

この『ハバクク書』は3章で終わる短い書物ですから、すぐに読んでしまえるので、ぜひ皆さんも読んでみていただきたいと思いますが、この書物の初めから2章4節まで、これはハバククと神様との対話の形になっており、初めはハバククの「主よ、私が助けを求めて叫んでいるのに、いつまであなたは聞いて下さらないのか。私が、あなたに『不法』と訴えているのに、あなたは助けて下さらない」（1:2）という訴えから始まっています。この頃南ユダ王国の人々は隣の大きな国であるアッシリアという国によって苦しめられていました。北イスラエル王国はこの時既にアッシリアによって滅ぼされていたのですが、この悲惨な状況は、もとはひとつの国であったイスラエルが、ソロモン王亡き後の跡継ぎの意見の違いによって南北に喧嘩別れしてしまった結果によるものでありました。いずれも神のことを第一に考えず、自分のことしか考えていなかったからです。そして神は残った南ユダ王国を苦しめていたアッシリアに加えて、カルデア人（バビロニア帝国）という新たな敵を創られたわけです。

バビロニア帝国の国民であったカルデア人については、1章6節以降に記されています。「それは冷酷で剽悍^{ひょうかん}（素早くて荒々しい）な国民。地上の広い領域に軍を進め、自分のものでない領土を占領する。彼らは

恐ろしく、すさまじい。彼らから、裁きと支配が出る。彼らの馬は豹^{ひょう}よりも速く、夕暮れの狼よりも素早く、その騎兵は跳びはねる。騎兵は遠くから来て、獲物に襲いかかる驚のように飛ぶ。彼らは来て、皆、暴虐を行う。どの顔も前方に向き、砂を集めるようにとりこを集める。彼らは王たちを嘲り、支配者たちを嘲笑^{あざわら}う。どんな砦をも嘲笑^{あざわら}って土を積み上げ、それを攻め取る」(1:6-10) やばいですね。ただでさえ近所に色々といちゃもんつけてくる鬱陶^{うっとう}しい隣人がいて困ってるのに、その上さらに物騒な輩^{やから}みたいな人が引っ越してくるようになったみたいなもんです。このようにハバククは、悪の力が栄えている時代を背景として様々な問いを神様にぶつけるわけです。アッシリアやバビロニア帝国による目に余る不正や暴力を、どうして神様は放っておかれるのか。私たちがこれほど助けを求めているのに。確かにもとは自分たちが間違っていたにしても、神様が自分たちよりもはるかに悪い行いの者たちをもって自分たちを懲らしめるとするのはなぜなのか……。1章17節にも「だからといって、彼らは絶えず容赦なく、諸国民を殺すために剣を抜いてもよいのでしょうか」とハバククの問いが記されています。これらのハバククの問いは、戦争や争い、殺人や偽りにあふれた現代を生きる私たちの感じる問いとも重なるところがあるのではないのでしょうか。「なぜ神様はこんな状況を放っておられるのか」「なぜ私が、あるいはこの人が、こんなひどい目にあわなければならないのか」「なぜ正直に生きる者が滅ぼされ、悪に生きる者が笑っているのか」……。こんなにひどい現実が、悪い夢であってくれたなら。幻であってくれたなら。今まさにアメリカを中心に起こっている人種差別や警察による暴力に対する抗議デモに連なっている人々の思いでもあるでしょう。昨日6月20日はアメリカにおいて奴隷制度が終わったことを記念する「奴隷解放記念日」でもありましたが、1600年頃に初めてアメリカに連れて来られたアフリカ人に始まり、1865年に形式的ながらも奴隷制度が終わりを迎え、今に至るまで、一体どれほどの人々がこの問いを抱えて来たことでしょうか。

そして本日の箇所において神様はハバククの問いに答えて言われます。「この幻を書き記せ。一目で分かるように(走りながらでも読めるように)、板の上にはっきりと記せ。この幻は、なお、定めのための、

終わりの時について告げるもので、人を欺く^{あざむ}ことはない。たとえ、遅くなくても待ち望め。それは必ず来る、遅れることはない。見よ、高慢な者を。彼の心は正しくない。しかし、正しき人はその信仰によって生きる」(2:2-4) 神様はハバククに幻を与えられます。それをはっきりと書き記せと。その幻というのは、終わりの時について告げるものであり、それはすなわち、今襲われている苦難からの解放の時、苦しみから喜びへの救いの約束が成就する時ということでしょう。それを待ちなさい。それは必ず来る。その約束は人を欺く^{あざむ}ことはない。今は苦しくて叫び声を上げざるを得なくとも、私はあなた方をその苦しみから必ず救い上げる。もちろんその成就がいつになるかは、あなた方人間には知りえないものだが、それが必ず来ると私が約束した以上、その約束が成就するのがあなた方の目から見てどれほど遅くならうとも、あなた方は待ち続けるのだと。

なぜ神様は苦難を放っておかれるのか、なぜこの叫びを聞いてくださらないのか、なぜ悪に対していつまでも正義が示されないのかという疑問、それは与えられた命を真面目に燃やしていきたくと願う人ほど、大きくのしかかるものかもしれません。しかし、私たちがそのような疑問を感じてしまうのは当然のことで、なにも信仰がたりないからでは決してありません。むしろ、そのような心痛む現実を、それほど問題に感じない者の方にこそ、私は怪しさを感じてしまいます。私たちにとって大事なものは、理解できない現実^{じじつ}に迷いながらも、そこに神様の計画を見出して行こうとすること、心痛む出来事だからこそ、そこにその出来事の意味を探して行こうとすることなのではないでしょうか。私たちの信仰にとっては、神様の御心^{ごこころ}に対して迷いが起きたり、神様に恨み^{うらみ}言^{こと}を投げつけることは恥ずかしいことではありません。それよりもむしろ、そのような現実^{じじつ}に心が麻痺してしまって、何も感じなくなること、神様に対する信仰と厳しい現実^{じじつ}の間での葛藤すら私たちの心に起きなくなることの方が、恥ずかしいことであるような気がします。信仰とはそういう迷いや葛藤の中で、こんな世界であっても神様の支配の内にあるのだと信じて生きて行くことであるように思います。この世の厳しい現実^{じじつ}は、私たち人間の目には一時的には不公平に見えることが多いかもしれません。しかし、どんな苦難が私たちを襲おうとも、私

たちの目に現在の状況がどれほど不公平に見えようとも、神様は最終的にすべての悪を必ず裁かれることを約束しておられます。「それは必ず来る、遅れることはない」と。

4節に「見よ、高慢な者を。その心は正しく（ありえ）ない。しかし、正しき（神に従う）人はその信仰によって生きる」とありますが、パウロも『ローマの信徒への手紙』や『ガラテヤの信徒への手紙』においてこの「正しい者は信仰によって生きる」という言葉を引用しています。また『ヘブライ人への手紙』にも、同じようなことが言われています。「だから、自分の確信を捨ててはいけません。この確信には大きな報いがあります。神の御心を行って約束されたものを受けするためには、忍耐が必要なのです。『もう少しすると、来るべき方がおいでになる。遅れられることはない。私の正しい者は信仰によって生きる。もしひるむようなことがあれば、その者は私の心に適わない』しかし、私たちは、ひるんで滅びる者ではなく、信仰によって命を確保する者です」（10：35－39）

ただ、私たちが気をつけないといけないのは、「待ち望め、忍耐せよ」というのは、「ひたすら文句を言わずに我慢しなさい」という通り一辺倒の意味ではないということです。私たちがこのハバククのように、あるいは新約聖書において、キリストに向かって救いを求める叫び声をあげた重い皮膚病の人や、病に伏せる娘のためにイエスの足元にひれ伏した会堂長ヤイロ、声こそあげなかったものの、勇気を持って人込みの中に出て行きイエスの衣の端を握りしめた「長血の女性」、エリコの近くでイエスに向かって「憐れんで下さい」と叫び続けた盲人などなどのように、具体的に助けを求める声を上げ、勇気をもって外へ出てゆくという形で救いを「待ち望む」ことこそが、こちらへ向かうキリストの足を速め、神の救いの到来を早めることになる、ということを感じたいと思います。目の前の現実が耐え切れないほどに苦しくて、こんなの夢であってほしい、幻であってほしいとってしまうことがあっても、私たちはその神様の約束、神様の与えられるもう一つの幻に信頼して、忍耐をもって、十字架へ歩まれたキリストの足跡をたどりつつ、つまり、私たちの生活の中で、具体的な形で信仰を表しながら、決して諦めることなく待ち望んでいきたいと思っています。